
ポケモン 不思議のダンジョン —時・闇・空の絆—

鬼狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン 不思議のダンジョン ―時・闇・空の絆―

【Nコード】

N4118M

【作者名】

鬼狐

【あらすじ】

とある海岸でヒノアラシが会ったのは、記憶喪失で元人間のポツチャマだった！そして、世界滅亡へのカウントダウンが――！

ブローグ

とある嵐の夜。

そこに、人間とポケモンがいた。

「くっ！ 大丈夫か！？」

「……たぶんっ」

「絶対に手を離すな！」

「でも、このままじゃあ……！」

「くっ！（手に力が入らない……！）」

ピシャアア……！！

「しまっ——！」

「——くそっ！」

そして、二人は離れ離れになってしまった。

その嵐の翌日。

プクリンの顔をした建物の前でうろついていた一匹のポケモンがいた。そのポケモンとは、ひねずみポケモンのヒノアラシである。

「うーん、どうしよう……。でも、勇気を出さなきゃ！」

ヒノアラシは、数回深呼吸すると、この建物に入ろうと足をすめる。

そして、勇気を出して柵(?)を乗せてある穴に乗った。

「ポケモン発見!! ポケモン発見!!」

「キャ！」

ヒノアラシは、突然その穴から聞こえた声に驚いた。

「誰の足型? 誰の足型?」

「えーと、足型はヒノアラシ! ……だったと思う」

「だったと思うって何だ!」

「だって、もういないだもん!」

その声の言った通り、ヒノアラシは、もう既にその場にいなかった。

さっきの場所とは、少し近くの海岸。

その海岸は、さわがにポケモンのクラブがいて、そのクラブが、泡を吐いていた。その泡は夕日に照らされて輝き、幻想のような風景だった。

そこに、さっきのヒノアラシは、いた。

「何で私はこんなに勇気ないんだろう……」

ヒノアラシは、ハア〜とため息を漏らした。

「……ん？ あれなんだろう？」

ヒノアラシは、海岸で何かを見つけた。

「あ、あれは……！」

ヒノアラシは、その何かに近づくとその正体はわかった。

「ポツチャマが……倒れてる！？」

プロローグ（後書き）

というわけで新作です。

何だかこの小説もグダグダになりそうですが、よろしく願います。

依頼1 元人間との出会い（前書き）

今回は、誰の視点でもありません。

依頼1 元人間との出会い

「ポッチャマが……倒れてる!？」

ヒノアラシは倒れているポッチャマへ駆け寄った。

「君、どうしたの!？ 大丈夫!？」

「……うう……」

ポッチャマは、うつすりと目を開けた。

（よ、よかった。目を覚ました）

ヒノアラシは、このポッチャマが無事だったことに胸をなで下ろした。

「……ここは、何処だい？」

「え、ええと、ここは海岸だよ。君は、さっきこの海岸に倒れてて……」

「え、ああ、そうなんだ」

ポッチャマは、ヒノアラシの方に振り返り、そして、固まった。

「……? どうしたの?」

「ぼ、ポケモンが喋ってる!?!？」

「？ 何言ってるの？ 君だって、ポケモン——ポッチャマでしょ？」

「何言つての？ 僕、（自称）立派な人間だけど？」

「え、ええっ！ 人間！？ どう見てもポッチャマだけど？ てゆーか、自分を立派って言っ！？」

ポッチャマは、自分の手を見た。すると、どんどん顔が青ざめていく。

「……もしかして、君、私を騙そうとして「ない！！」……その根拠は？」

「だって初対面の女の子に騙そうとするわけ無いだろ。僕が言っていることは、本当の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対の反対だぜ」

「……反対を何回言っただの？」

「20回、の筈。つまり本当ってこと」

「案外、めんどくさいんだね、君。……でも、悪いポケモンじゃないさそうね。「そうさ」でも、元立派な人間なんだぜ」元立派な人間って……」

ヒノアラシは、ポッチャマのことを信用し、ニコリと微笑んだ。

「さつきは疑ってごめんね。私はヒノアラシ。それで、君は何処から来たの？ あと名前は？」

（うーん、あれ？ 何処から来たんだっけ？ てゆーか、ほとんどの事が思い出せない……………）

「えーっと、名前はフォンって言っただ。それでどこから来たのかは思い出せないんだ」

「え、それって、もしかして、記憶がないの？」

「そっこの事だね」

フォンは、ガツクリと頂垂れた。

瞬間、ドンツと何かヒノアラシのぶつかった。

「きゃ！」

その何かとは、紫色のデコボコした球体みたいなどくガスポケモンのドガースと、こうもりポケモンのズバットだった。

「おっと、すまねえな」

「痛っ！」

「お前が持っていたこの石を頂く為にやっただよ。悪く思っな」

そう言ったズバットは、石ころを持っていた。

「あっ！ それは、私の宝物ー！」

「もらっていくぜ」

「ギルドにも入れない弱虫ちゃんには、こんなもの必要ねえんじゃないか？」

「うつ……………」

ヒノアラシは反論することが出来なかった。

「じゃあな」

ス 夫とジャイン（フォンが勝手に名付けた）は、ヒノアラシの宝物を持って、近くの洞窟に入っていた。

「ど、どうしよう……………、私の大切な宝物が……………」

ヒノアラシの目から、一筋の涙が流れた。

「あれは、ヒノアラシにとって、大事なモノなんだよね？」

「えっ……………」

「あれが、自分にとって大切な物だったら、取り返せばいいんだよ」

「でも……………、私、臆病だし、怖いし……………」

「『でも』じゃない」

フォンは、キツパリと言いつつ放った。

「もしかしたら、ここが君が変われる分岐点だとしたら？」

「変わる……？」

「君だって、宝物を取り返して、臆病じゃなくなったら、嬉しいでしょう？」

「それは……」

それは勿論、嬉しいに決まっている。

「……うん。私だって…、私だって！ 変わりたい！」

ヒノアラシは、腕で涙を拭う。

「宝物だって、取り返したい！」

「……まったく、我儘な女の子だね。……仕方ないから、僕も行こうかな」

「……えっ…、でも」

「僕は、女の子を一人にさせるような薄情の男じゃないんだよ？」

「……ありがとう」

「お礼は、取り返してから、だよ？」

ヒノアラシは、頷いた。

「じゃあ、行こうか」

「うんっ」

フォンたちは、走りだした。

依頼1 元人間との出会い（後書き）

はい！というわけで自称立派な主人公のフォンです。

フォン「何その言い方……………（汗）」

いいじゃねえか」

ヒノアラシ「取り返せるかな……………」

さあ、どうだろうね。

依頼2 海岸の洞窟 VS ドガース&ズバット！（前書き）

今回は、ヒノアラシの宝物を取り戻そうという話d

フォン&ヒノアラシ「それでは、どうぞ」

人のセリフを取るなど、お前ら人間じゃねえ！！

ヒノアラシ「私、ポケモンだし」

依頼2 海岸の洞窟 VS ドガース&ズバット！

海岸の洞窟。

僕たちは、ガキ大将ドガースたちを追いに来たわけだが。

「小説や漫画なら、多分ガキ大将ドガースたちは、この洞窟の一番奥にいったんだろうね」

「ガキ大将って……」

そんな会話をしながら、宝物を取り返すために、洞窟内を進んでいく。

その時。

「あ！ 野生のシエルダー、カラナクシ、サニーゴが飛び出してきた！」

僕たちの目の前にシエルダー（以下省略）が出てきた。

「何で説明口調なの？」

「ゆけっ！ ヒノアラシ！」

「私——！？ 圧倒的に不利じゃない！？」

「いや、僕、技の使い方知らないし」

ヒノアラシは、項垂れた。

あれ、僕、変なこと言った？

「とりあえず」

ヒノアラシは、どうする？

↓たたかう

どうぐ（なし）

逃げる

殺っちゃう

土下座

道案内してもらう

お友達になる

下僕となる

「だから、何でゲーム風！？ しかも、意味分かんないのもあるけど！？ てゆうか、フォンも手伝ってよ！」

「えー、めんどい」

「フォンが、一緒に付いて来るって言ったのに……」

「まったく仕方ないな。の 太くんは」

「誰がよ!?!」

僕は、ツツコミを入れたヒノアラシをスルーし、サニーゴに見事なヤクザキックをお見舞いした。

サニーゴは、その勢いに飛ばされシェルダーにぶつかり二体とも気絶した。

「フォンは、3 / 7 の経験値を手に入れた」

「低っ！しかも、微妙な数値！」

「二体倒したからあとはヒノアラシが倒してね」

「う、うん。わかった、“ 火炎放射”」

カラナクシは、ぎゃああ！と叫びながら黒焦げになった。

「てゆうか、こんな強力な火炎放射使えるんだったら、あいつらに勝てるでしょ？」

「うっ……」

ヒノアラシは、痛いところ突かれた。

「まあどうせ、勇気がなかったただけだろうけどね」

「うっ！」

再びグサッと僕の言葉の刃がヒノアラシに突き刺さった。

おおっと、ヒノアラシは、既に涙目になっているではありませんか。

「まあ、でも、変わるんじゃない？ 何時かは」

「……………」

ヒノアラシは、無言で頷いた。

「よし、ここで立ち止まっても何も変わらないし行こっか。」

「……うん」

こうして僕たちは、飛び出してくる敵を倒しながら（僕はキックで）奥へ進んでいった。

海岸の洞窟 奥底。

「どうやらここが一番奥みたいだね」

「うん。…あ！ あそこ！」

そこには、ジャインとス夫（注：ドガースとズバットです）がいた。

「アンタたち！」

「？ おやおや、さっき会った弱虫ちゃんじゃねえか」

「わ……私の宝物をか、返してよ！」

こいつらが怖いのかヒノアラシの声が震えていた。

「ハハッ！ 声が震えてんじゃねえか！ 体って正直だよなあ」

「返せって言われて返す奴なんていねえよ!」俺のものは俺のもの、お前のものも俺のものだから?」そうそう……ってちげえよ!」

「だったら、力ずくでも返してもらっけど」

「威勢のいい奴だn」「突付く」おっと!」

な、何だと!? 僕の最初に出した技が、避けられただと! 僕の初めて技を使ったが、ドガースに簡単に避けられた。

「ケツ、それじゃあまず、弱虫ちゃんからだな」

ドガース達が、ヒノアラシに迫る。

「女の子を虐めるなんて、男として最低だよね」

「ぐがつ」

ドガースに僕のヤクザキックがヒットした。

「てめえ、何しやる!」

「キモイから、さっさと消えてくれないかい? それとも、ドタマかち割ろつか?」

「ぐつ」

僕のニッコリと絶対零度スマイルに、ドガースたちは、少し後ずさる。

なんだこれ、何かに目覚めそうだぞ。

「こ、こんなもん返してやるよ」

ドガースが、欠片のような石が転がってきた。

「案外弱い奴だったな」

僕は、石を拾い上げながら呟いた。

「今、スゴイものを見た気がする」

「え、そう？ あ、はいこれ」

ヒノアラシに石を返してあげた。

「あ、ありがとうっ」

「どーいたしまして。さてと、帰ろっかな」

「うん！」

こうして、僕たちは、海岸に戻った。

海岸。

「ねえ、その石って一体何なの？」

「これはね、『遺跡の欠片』って言うんだよ」

「遺跡の、欠片…？」

「うん。っていつてもね、勝手にそう言ってるだけなんだよ。あと、これよく見てみて？ 不思議な模様が描いてあるでしょ？」

ホントだ。何だか複雑な模様が書いてある。

「ね？ 何かの遺跡にありそうでしょ？」

「まあ、確かに」

「私ね、この石が何なのか解き明かすのが夢なんだけどね」

「ふーん」

「反応薄っ！ ……それでフォンはどうするの？ これから」

「考えてない♪」

「考えてないのにそんなに明るいのは何故！？ ……じゃ、じゃあ、私と一緒に『探検隊』やってくれない？」

「探検隊？ なにそれ？ おいしいの？」

「とりあえずスルーで」

「ガーン」

酷いつ、酷過ぎる！

「声に出すぐらいまで、落ち込まなくても……。それで一緒に探検隊やってくれない？」

「めんどくさそうなので却下」

「えええええ！」

「でも、このままじゃあ、物語が進展しなくなりそうだから、オーケーってことで」

「え、それって、“うん”ってこと？」

「だって、このままじゃあ、プロローグ含め三話で完結なんていやだからね」

「そんなメタ発言を……」

「それに、君をこのままにしていたらいけないと思ったからね」

「…………と、とりあえず、ありがとう♪ これからもよろしく！」

「うん。よろしく」

「それじゃあいきましょ！ ギルドに！-！」

「急にテンションが上がったね」

こうして僕たちは、ギルドと呼ばれる場所と走りだした。

依頼3 ギルドへ！

ここが、ギルドか……すごい規格外だなあ。

僕たちは、ギルドの前に立っていた。

そしてそのギルドの建物の外装が、プクリンの形を模していた。

「探検隊になるにはまずギルドでチームの登録をして、一人前になるまで修行しなきゃならないんだよ」

「でも、門閉まってるけど？」

入り口は、鉄格子のようなもので閉まっていた。

「あそこに立てばいいと思うんだけど……多分」

今、多分って、言った？ 言ったよね？

ヒノアラシが示した位置に、妙な穴を発見した。その穴には、格子が張ってある穴だった。

「じゃ、じゃあ私が乗るね」

「いつてら〜」

ヒノアラシは、震えながら穴の上に乗った。そんなに怖いんでしゅか？

「ポケモン発見！ ポケモン発見！」

「誰の足形？ 誰の足形？」

穴の中から、二つのちがう声が聞こえた。

「キャ！」

「足形はヒノアラシ！ 足形はヒノアラシ！」

「よし。後ろに居るもう1匹も見張り穴の上に乗れ」

「なっ！ どうして穴にものっていない僕がいることがわかったの！？ もしかして、UMA（未確認生物）！？」

「「「いやいやいや！ 違うから！？」」」

ヒノアラシと穴から聞こえる声がハモった。

「初対面のヒノアラシとハモるなんて！ やっぱりUM「「「だから違うって！」」」シンクロ率高くない？」

「とりあえず、フォンもこの穴に乗って！」

「……わかった。僕が乗ることを光栄におもうがいい！」

僕は、渋々穴の上に乗った。

「ポケモン発見！ ポケモン発見！」

「誰の足形？ 誰の足形？」

「足形は……足形は……」

おおう、これはもじゃ……。

「おい！ どうした！ 見張り番のディグダ！！ 応答しろ！」

ディグダと呼ばれた甲高い声の方は、投げやりな感じで答えた。

「足形は…… 多分ポツチャマ！ 多分ポツチャマ！」

「多分ってなんだ！！」

「だって！ この辺で見かけない足形なんだもん……」

話しの内容からして、どうやら僕の足型がわからず、揉めているようだ、やれやれ。

「確かにポツチャマは見かけないが…… 良いだろう！ 入れ！」

その声がそう言った瞬間、目の前の門が開いた。

そして、中に入ると地下に下りる梯子があり、僕たちは梯子を下りるとそこにはなかなか広い広間に、何匹かポケモンがいた。

「わぁ！ 沢山のポケモンがいるよ！」

ヒノアラシは、その光景を見て、キヤイキヤイ騒いでいる。子どもか。

すると一匹のポケモンが声をかけてきた。

「おい！」

僕たちは、振り返ると、鳥のような体をして顔が音符型になっているおんぷポケモンのペラップが立っていた。

「さっき入ってきたのは、お前達だな？」

「YES！」

「勧誘やアンケートならお断りだよ。さあ、帰った帰った」

「えええ！　ち、違うよ！　そんな事で来たんじゃないよ。探検隊になりたくて……探検隊の修行をするために来たの」

ヒノアラシの言葉に今度はペラップが驚く。

「え！探検隊！？」

ペラップは、そう言う和二匹に背を向けて、独り言のようにブツブツ呟いた。

「今どき珍しい子達だよ。ギルドに弟子入りたいとは。厳しい修行は耐えられないと言って、脱走する者も後を絶たないというのに……」

「ねえ、修行って厳しいの？」

ヒノアラシが聞くとペラップは慌てだした。

「いやいやいやいや！　そんな事はないよ！　とても楽チンだよ！」

ちょー棒読み（笑）

「探検隊になりたいなら早く言ってくれなきゃ」 うんうん」

いきなり機嫌がよくなった。なんだコイツは。

「チーム登録をするならこっちだよ、さあ、早く早く」

ペラップは、突然歩き出し、僕らはそのについていく。

ギルド 地下二階。

まさか、もう一つ階があるとは。

「さて」

今3匹は、ある扉の前に立っている。

「ここが親方様のお部屋だ。くれぐれも…くれぐれも、無礼のないようにな」

大事な事だから、二回言いました、的な？

「わかった」

ペラップは、扉をノックする。

「親方様、ペラップです。入ります」

そう言うと、ペラップは二匹を連れて部屋に入った。

「親方様、この者が、新しく弟子入りを希望する者達です」

ペラップが言う。が、親方様と言われたプクリンは振り向かない。

「親方様……親方様？」

「やあ！」

プクリンは、突然振り向いた。

「僕、プクリン！ ここのギルドの親方だよ？ 探検隊になりたいの？ じゃあ、一緒に頑張ろうね！」

「は、はい！」

ヒノアラシは返事をした。

このギルドの形といい、親方さまといい凄く規格外！

「じゃあ、君達のチーム名を教えてください？」

「ええ！？ チーム名？ 考えてなかった……。フォン、何かいいのある？」

「振られた！？ ……………じゃあ“ウィング”ってのは？」

「何で？」

ヒノアラシが聞いてきた。

「ぶっちゃけ、テキトー」

「テキトー！？」

「決まりだね。じゃあ“ウイング”で登録するよ」

するとペラップは急いで耳をふせぐ。

ペラップを見ていた二匹は頭に？　しか浮かばなかった。

「登録♪　登録♪　みんな登録……たあー！ー！！」

「ひゃあ！」

親方は突然ハイパーボイスを放った。

な、何故だ！？

「おめでとう！　これで君達も今日から探検隊だよ。記念にこれをあげるよ♪」

親方は、僕に探検隊キットを渡した。

「探検隊キット？」

「うん。探検隊に必要な物が入っているんだ♪　開けてみて」

開けてみると、探検隊バッジ、不思議な地図、トレジャーバッグが入っていた。

「まず探検隊バッジ。探検隊の証だよ。そして不思議な地図。とても便利な地図だよ。最後にトレジャーバッグ。ダンジョンで拾った道具を入れておけるよだよ。中を開けてごらん」

バックを開けるとバンダナが入っていた。

「あ、ありがとうっ」

「それじゃあ頑張ってねっ」

こうして二匹の探検隊の修業が始まりました。（笑）

「何で（笑）なのよ！」

依頼 4 初仕事（前書き）

頑張ったぞおおお！

フォン「はいはい」

冷たい…（汗）

ヒノアラシ「それじゃあどつど！」

お前も冷たい…（泣）

依頼 4 初仕事

「起きろおおおおおおおおお！！ 朝だぞおおおおおおお
おおおおおー！！！！！！！！！！」

僕たちが探検隊になった次の日の朝、一匹のポケモンが僕たちを
起こしに来た。

だが、そのポケモンの声の大きさは想像以上だった。

「耳がああ！ 耳がああ！」

「寝ぼけんじゃねえ！ 俺は、ドゴームだ！ とつと起きて支度
をしろ！！」

そう言うと、ドゴームは部屋を出ていった。
こんな時に自己紹介かよお……！！

「支度？ 支度……はっ！」

ヒノアラシはあることを思い出した。

「そうだ！！ 私達は、ギルドに入ったんだっ！！」

「あゝ、って寝過ごしたみたい。早く行かなきゃなあ」

僕たちは慌てて部屋から出ていった。

朝礼はいつもプクリンの部屋の前の広場で行われるらしい。既に
僕たち以外の弟子達は全員集合していた。

「遅いぞ！！ 新入り！！」

やっと来たかとも言うようにドゴームが大声でいった。

「うるさい！ お前の声はでかすぎるんだよ！！」

どうやら、ペラップもドゴーム（あいつ）の声をうるさいと感じているのは、みんな同じなようだ。

ほら、周りの弟子も頷いてる。どんだけ大声なんだよ。

「全員揃ったな。では、これより朝礼を行う」

ペラップはそう言うと、プクリン親方の部屋に叫んだ。

「親方様、全員そろいました」

そしたら中から親方様が出できた。

「それでは親方様、お願いします」

だが返事はない。

「……親方様？」

「……ぐう……ぐーうぐうぐう……」

……はい？ いびきっすか？ 目開けたままで、立ちながら寝てるの？

すると、弟子達がヒソヒソと話した。

「（親方って相変わらず凄いよな……）」

「（ああ。本当にそうだよな……）」

はい。どうやらこの光景は普通のようにです。

「ありがたいお言葉ありがとうございます！」

何にも言っていなかったよね！？ マジで！

「さあ皆、朝の誓いの言葉！ 始め！」

すると全員で声を揃えて元気に言い始める。小学生ですか？

「「ひとっ！ 仕事は絶対サボらない！」

ふたっ！ 脱走したらおしおきだ！」

みつっ！ 皆笑顔で明るいギルド！」

ふむ、なるほど。

「さあ皆、仕事にかかるよ」

「「おおー……！」」

すると皆、それぞれの仕事をしに向かっていった。

「どうすればいいのかな？」

「うゝむ……」

と、迷っていたら、

「お前たち、お前たちはこっちに来なさい」

と言われ、二匹はペラップについていった。

ギルド 地下一階。

「今日はお前達にはこの掲示板の仕事をやってもらう」

「掲示板？」

「この掲示板には、各地からの依頼が集まっているんだ。まず、お前達には、これをやってもらおう」

ペラップは、一枚の紙をフォンに渡した。

「えゝつと、『湿った岩場』というところで私の真珠をとってきてください！ お願いします！ バネブーより……うん。ただの落とし物を拾ってくるだけだ」

「う……、わかった……行ってくる」

やけにヒノアラシのテンションは低かった。

湿った岩場。

文字通り、湿っている岩場である。

「はぁ」

ヒノアラシは、ため息を出した。

「どつたの？」

「ちょっと、もう少し探検隊らしい事がしたかったんだ」

「……でも、まだ僕たちは新米だからね。何時かは探検隊らしい事ができるよ。その時は、いろんな所を探検すればいいんだよ、でしょ？」

「……………うんっ、そうだね！」

ヒノアラシは、元気になってくれたようだ。

僕たちが進んでいくと、リリーラやカラナクシたちが飛び出してきた。

「敵の数は、リリーラ一匹とカラナクシ二匹だね。だったら僕がカラナクシを倒すから、ヒノアラシはリリーラをよろしく」

「わかった。“火炎放射”！」

ヒノアラシの火炎放射は、見事にリリーラにヒットし見事に倒した。

「あ、案外簡単だった……」

ヒノアラシは正直ビックリした。

「おー、ヒノアラシ。倒したんだね」

そこに、フォンが帰ってきた。

「案外早かったね。」

「うん。銀の針を見せたら、逃げてった」

「脅したの!？」

「これも戦略の一つさ。先に進もう」

「う、うん。」

こうして僕たちは奥に進んで行った。

湿った岩場 最深部。

さきほどよりも、湿り気が上昇している。さすが最深部。

「あ！ フォンあったよ！」

「本当だ。結構綺麗だね」

バネブーの真珠は、予想以上に綺麗だった。

「よし、帰ろっか」

「うん」

ギルド 掲示板前。

「ありがとうございます！ ワタシこの頭の上に真珠がなかったせいで……落ち着かなかったですけど、そんな心配もなくなります！ これはお礼です」

するとフォン達はタウリン、リゾチウム、ブロムヘキシン、2000ポケを貰った。

「では」

バネブーは、帰っていった。

「フォン凄いいよ！ 私達いきなり大金持ちだよ！」

え？ そうなの？

2000ポケって200円ぐらいかと思った。

「がんばったな」 だが、金は預かっておくぞ」

「What？」

「この2000ポケから、ギルドの取り分をさっぴかせてもらっぞ」

と、言われて渡されたのは200ポケ……。

このクソオウムがあああああ！！

僕の異変に気づいたヒノアラシは、

「（フォン！ 抑えて抑えて！ しょうがないんだよ！ だから我慢して！）」

と、小声で言った。

僕は、小さくため息を吐いて「わかった」と小声で言った。

「とりあえず食堂に行こ？」

「うん。お腹減ったしね。」

僕たちは、食堂でご飯を食べた後、昼間の疲れですぐに眠ってしまった。

依頼4 初仕事（後書き）

フォン「つかーれーたー」

おーつかーれー

フォン「あのクソオウムのせいで余計に疲れた気がする」

ヒノアラシ「まあまあ（汗）」

次も頑張れ
では。

依頼5 準備（前書き）

更新遅れてすみません。

今回、すこーしだけ、オリジナルだよ。

フォン「何処が？」

色々。

「「みつっー！ 皆笑顔で明るいギルド！」」

「……………では仕事にかかるよ！」

「「オーー！！！」」

朝礼を終えると今日も他の弟子達は、自分の仕事に取りかかるため持ち場へとついていった。

「さてと、それじゃあ依頼を見に行こうか」

「うん」

こうして僕たちは、掲示板の方へ向かった。

ギルド 地下一階。

「どれにしようか？」

「そうだねえ。う——む」

と、僕たちはどの依頼にするか迷っていたその時。

「あ、あの！」

「？」

僕たちは、声の掛けられた方を向いた。
そこには、せんこうポケモンのコリンクがいた。

「えっと、探検隊……ですよね？」

「え、そうだけど」

「お願いがあります。妹を助けてください！」

……はい？ いきなり何を言い出すんだいこの子は？

「えっと、どういう事？」

ヒノアラシが、僕の代わりに尋ねた。

「実は……」

今、僕達はギルド前にいた（つまり見張り番の穴があった場所辺りだ）。

「さっきのコリンクの話では、あのコリンクの妹が原因不明の病気にかかって、ガバイトの鱗が必要だから、取ってきて欲しい……という依頼だよね？」

「うん。でも、ガバイトの居場所って言うと『迷宮の洞窟』ぐらいしか……」

「『迷宮の洞窟』？」

「えっと、荒地の先にある深い洞窟で、そのガバイトは、気が荒くて強いって評判なんだよ」

「ふうん。面白そうだね」

ヒノアラシに、嫌な予感が過ぎった。

「ま、まさか行く気なの！？」

「ふ、愚問だぜ」

「で、でも、危険だよ！？」

「危険でも、やらなくちゃいけないことだってあるんだよ」

「……っ」

「それに、ガバイトのことは知ってるし」

「え？」

「フカマルの進化系で、ほらあなポケモンと呼ばれていて、高さ1・4 m重さ56・0 kgで、特性は“すながくれ”。雄の背中の鰭には切れ込みが存在して、棲家には掘り出した宝石を集めており、それを狙う泥棒が後を絶たないという。また、その鱗から作った薬は、不治の病を治すと言われている——だよね？」

「え、う、うん」

ヒノアラシは、正直ガバイトの情報をこんな詳しく聞くななんて初めてだった。

「それでも、準備とかしていった方がいいかもね」

「あつ！ それなら、トレジャータウンに行こっ！」

「トレジャータウン？」

「うん。ついて来て！」

そう言うと、ヒノアラシは走りだした。

「あつ、ちょ！ 待って！」

僕も、急いでヒノアラシの後を追った。

トレジャータウン。

到着しました。

え？ 何処につて？ トレジャータウンだよ。

それと、トレジャータウンを見た僕はポカーンというような顔になつてゐる。と思う。

トレジャータウン……ギルドと同じように規格外でした。はい。

…え？ どんな所がつて？ 建物が。

わかりにくいって？

だから、トレジャータウンにある建物が全てギルドと同じようにポケモンの形だからだよ。

なんだろう、こういう建物はブームなのか？

まあ、結構に賑わっているのは良い事なんだけだね。

「さつきから何やってるの？」

「何で途中から入ってきたの？」

「いや、何やってるのかな、って思っちゃって」

「何って、読者に分かりやすく説明してるんだよ」

「読者って…？ とりあえず、行こっか」

「合点だ」

「あ、ちょっと待って」

「？」

ヒノアラシが立ち止まったのは、おむかえポケモンのヨマワルの形をしている建物だった。

勿論、そこにいたのもヨマワルだった。

「ここは、ヨマワル銀行って言うんだけどね。名前の通りお金の管理をしてくれるんだよ」

「ふーん」

「ちょっと待っててね。お金取りに行ってくるから」

と、言うヒノアラシは走って行った。

そして、約2分後ぐらい。

「お待たせ」

ヒノアラシが戻ってきた。

「それで、どんだけ引き取ったの？お金」

「えっと、10000ポケぐらいかな」

「…いやいやいや、ヒノアラシって金持ち？」

「うん。違うよ。これは、変態な…シスコンって言うのかな？
そんなお兄ちゃんがふりこんでくれるんだ」

「へえ。…ってゆーか、お兄さんいたんだ」

「うん。さっきも振り込まれていてね、合計で45000000ポケ
だったんだよ」

「うわ、どんだけシスコンなの？ 君のお兄たん。
てか、この前20000ポケ出したバネブーが……」。

「そんなことより、道具を買いに行こう」

「うん、そうしようか」

「……だよ」

「へえ」

二匹が立ち止まったのは、カクレオンの形の建物の前だった。勿論、カクレオンはいた。だけど、カクレオンは二匹いて、その内の一匹は薔薇色の色違いだった。

「ここは、カクレオン商店って言ってね。色々な道具を売ってくれるんだ」

「へえ」

「それじゃあ、買ってくるね」

と、言つとヒノアラシは走って行った。

…そして、約1分30秒後ぐらい。

「お待たせ」

ヒノアラシが戻ってきた。

「何買ったの？」

「リンゴとか、オレンの実とか、グミとかだよ。」

「何だか、食べ物ばかりじゃない？」

「うっ……気にしちゃあダメだよ」

「そうかな」

「そうだよ」

「それじゃあ、行こうか。『迷宮の洞窟』へ」

「うん！」

こうして、僕たちは『迷宮の洞窟』へ向かった。

トレジャータウンをもっと知りたい読者のために、他の店の紹介をしよう。

『カクレオン商店』と『ヨマワル銀行』以外にも、トレジャータウンにはたくさんのお店がある。

1つ目、『ガルーラ倉庫』

勿論、そこはガルーラが運営している。思いやりのあるおばちゃんらしい。

あと、ヒノアラシのお兄さんがヒノアラシのために色々預けているらしい。シスコンだね。

2つ目、『エレキブル連結店』

勿論、そこはエレキブルが運営しているらしいけど、今回は店に
いなかった。

エレキブルは「ガハハハ！」と笑うおっちゃんらしい。

3つ目、『おせわやラッキー』

勿論、そこはラッキーが運営している。

依頼のお礼で貰ったポケモンのタマゴを預かって、孵るまで育て
てくれるらしい。

なんて心の優しいポケモンだろうか。

4つ目、『ネイティオ鑑定所』

勿論、そこはネイティオが運営している。

探検中に拾ったたからばこを鑑定してくれるらしい。

無口で無表情だが、多少変質者になる事もあるらしい。謎多いキ
ヤラだね。

5つ目、『ガラガラ道場』

勿論、そこはガラガラが運営していたらしい。

今は潰れていて、ガラガラは何処かで特訓をしているらしい。

自分の道場で特訓すればいいのに…（汗）ガラガラは、田舎なま
りで話すらしい。

以上。

「だから、さっきから何やってるの？」

「だから、何で入ってくるの？」

依頼5 準備（後書き）

色々疲れた。

フォン「お兄さんって……（汗）」

ヒノアラシ「シスコンなんです。（汗）」

いつか会うつことになるからね。

フ・ヒ「えっ!?!」

さて、今回はついにガバイトと対決です。

依頼 6 VS ガバイト ビビった時の戦い方（前書き）

さて、今回はガバイトとのバトルです！

そしてggdggdです！

フォン「それでは、どうぞ！」

依頼 6 VS ガバイト ビビった時の戦い方

「ここが、『迷宮の洞窟』か……」

僕たちは、『迷宮の洞窟』の前にいた。

「何だか不気味だね」

ヒノアラシが少し震えた声で言う。

まあ、確かに洞窟からは、不気味のオーラみたいなものを感じた。

「とりあえず、行こうか」

「う、うん」

僕たちは、洞窟の中に入っていた。

迷宮の洞窟。

ネーミングがそのまま、なんてツツコミを入れてはいけない。

「何だか中に入ると、余計に不気味だね」

先程までは声だけが震えていたが、今では体も少し震えていた。

「安心していいよ。僕が付いてるから」

キラーン　とホスト的なスマイルをヒノアラシに向ける。

「う、うん」

「……！　ヒノアラシ、伏せて」

「えっ……！」

突然のことで驚いたが、すぐに言う通りに伏せた。
すると、自分たちの頭の上を数匹のコウモリポケモンのゴルバツトが通っていった。

「あ、危なかった」

「ありがとね」

「別にいいんだよ。それより早く行こうか」

「うん。」

こうして、二匹は奥へ進んでいった。

「大丈夫？ ヒノアラシ」

「う、うん。今のところは」

今、僕達は危険な場所にいます。

え？ どんな場所って？

簡単に言つと、左は壁、右は崖の間の小さな細い道を進んでいる。
そんな状況なのだ。

「危なくなったら言つてね」

「う、うん。でも、大丈夫ってうわっ！」

言ってる傍から、ヒノアラシの足場が崩れた。

「ヒノアラシっ」

ギリギリのところで、ヒノアラシの手を掴む事ができた。

「だ、大丈夫？ ヒノアラシ」

「う、うん。ありがとう」

さて、ココで考えて貰いたい。

今、僕たちが進んでいた道は、歩いただけで崩れそうな細い道だ。
そんなところで、ヒノアラシを引き上げようとすると、足場に体
重が掛かってしまう。

勿論、ヒノアラシも。そうならば……。

「うわぁー!!」

当然、僕の足場が崩れた。

「きゃあああああ!!」

「くっ……………」

僕は、ヒノアラシの頭をかばうように腕で包んだ。
くそっ……………こうなったら……………!

「バブルこうせん”!!」

崖下に向かって“バブルこうせん”を放った。
成功してくれよ……………、いや、マジで。
徐々に地面が見えてくる。
そして……………。

ポヨーン。

「きゃー!!」

弾かれた。

勿論それは、地面ではない。

「大丈夫? ヒノアラシ」

「う、うん。大丈夫。でも、何が起こったの？」

「これだよ」

と、僕が指さした先は……。

「あれって……泡？」

そこにあつたのは、大量の泡だった。

「うん、そだよ。僕が落ちる前に“バブルこうせん”を下に向かって放つて、その泡をクッション代わりにして地面への衝突を防いだんだよ」

「へえ。そうなんだ。…痛っ…！」

ヒノアラシは、自分の足をおさえた。

「足りじいちゃったみたい」

「……仕方ない。僕がおぶって行くよ」

「えっ！ いいよ別に！ そんなことしなくても」

「でも、動けないだったらどうすることもできないよ？」

「で、でも……」

「反論禁止！ ほら、早く」

「……う、うん」

渋々、ヒノアラシはフォンにおぶられることになった。

迷宮の洞窟 最奥部。

最奥部は、周りの壁に色鮮やかな結晶がたくさんあった。綺麗だ。

「誰だ？ 何しに来た？」

何処からか声が聞こえた。多分、ガバイトだろう。

「僕たちは、ガバイトの鱗を貰いにきた」

「…俺の鱗か」

そう言うと、ガバイトが天井から降ってきた。

「コリンクの妹の命が掛ってるんだよ、お願い！」

「そんなこと知ったことか！ まったく。昔からお前たちみたいな奴らを山ほど見てきたんだ！」

「……それじゃあ、どうしたら分けてもらえる？」

「フン。俺と勝負しろ。タイマン張らせてもらっぜ。それで勝てたらお前に分けてやる」

「オーケー」

フォンは、ヒノアラシを下ろした。

「ヒノアラシは、下がってて。危ないから」

「うん。あつ！ フオン危ない！」

ドガツと僕の腹にガバイトの攻撃が直撃した。

「ぐううう」

突然吹き飛ばされた。

「おいおい。勝負は、お前が承知した時から始まってるんだぜ？」

「今のは、“ドラゴンダイブ”！ フオンに直撃しちゃった……」

が、僕は立ち上がることができた。

「フォン……！」

「ほう。なかなかやるな。」

まあ、立ち上がったのはいいけどさ。僕の体が震えていた。

「ま、まさか“ドラゴンダイブ”でひるんじやったの!？」

「フハハ！ 俺にビビったようだな」

体に力が入らない。これって、絶体絶命じゃない？

「フォン……！」

「だったらもう終わらせてやるよ！ “ドラゴンダイブ”！」

ガバイトは、僕に向かってドラゴンダイブを繰り出した。

「くらいやがれ！」

が、僕は、ドラゴンダイブが直撃するまえに左に逸れて攻撃を避けて、ガバイトに踵落としをくりだした。

「がっ！」

「フォン……よかった」

ヒノアラシは、胸をなで下ろした。

「……あれ？ フォン震えが止まっている」

ヒノアラシが、僕の震えが止まっていることに気づく。

「ギリギリセーフ……」

その時、ヒノアラシとガバイトがあることに気付く。

「……まさか！ さっき、目を瞑って攻撃したの！？」

そう、僕は目を瞑っていたのだ。

「そうだよ。さっきドラゴンダイブを受けた時、君にはビビったけどさ。だけど、目を瞑ってそんなことリセットしたんだだけ。要は見なけりゃいいんだよ」

「で、でも、目を瞑ってあんな攻撃なんて不可能なんじゃない？」

「人間っていう生き物は、膨大な視覚情報を処理するのに脳の演算機能を半分以上使っているんだよ。そこを目を瞑ってカットすれば、『その分』をパワーとか！ スピードとか！ に回せるんだよ。と言っても、ただ単の理屈だよ。実際には戦闘力は倍増とかしないんだよ。それに、今は人間じゃないけどね」

「て、てめえ！」

「それに、君が突っ込んでくる時に、ギャーギャーうるさいから、場所ぐらいの検討はつくんだ。 “白い霧”」

僕は、白い霧を発生させた。

「へ！ それがどうした！ “砂地獄”！」

ガバイトの放った砂は、竜巻のようになり白い霧を吹き飛ばした。そしたら、僕の姿がはつきり見えるわけだ。

「これで終わりだ！ “ドラゴンダイブ”！」

ドラゴンダイブは見事にフォンに直撃した。
だが、ピシッと何かが割れる音だけが聞こえるだけ。

「!?!」

割れる音の発信源は、この最奥部にある結晶の一つだ。

（ま、まさか俺が攻撃したのは、結晶に写ったあいつの姿!?!）

「いや、まさかこんな簡単なことに引っかけってくれるなんてね。
“渦潮”!」

ガバイトの後ろにいた僕は、渦潮を放った。

「ぐわあああああ!」

直撃し、ガバイトは倒れた。

「や、やった! フオンが勝った!」

「ふう〜」

「でも、危なかったんじゃない? 結晶に写った姿を罠にするなんて」

「でも、ガバイトは、ちょっと頭に血が上ってたからね、もしかして成功するかなあ、なんて。そんなことより、オレンの実を持ってきたよね? 出してくれる?」

「うん。はい」

ヒノアラシは、バックからオレンの実を取り出して、僕に渡した。

「ありがとう」

そう言つと、ガバイトの方に向かって歩いていった。

「おつかれ」

僕は、ガバイトにオレンの実をもたせた。

「…嗚呼。ありがとうな」

ガバイトは、立ち上がりオレンの実を食べながら礼を言った。

「コレやるよ」

というと、ガバイトは僕に何かを投げた。

僕は、それをキャッチして見てみる。それは、ガバイトの鱗だった。

「おー、サンキュー」

「約束だからな。久々に良いバトルだった」

「また何時かバトルしよう」

「嗚呼。望むところだ」

（…さすがフォンだ。さっきまでフォンはガバイトに恐怖を抱いて

いたのに、今ではそれがなかったように仲良くなってる。ガバイトも同じだよな。さっきまで、あんな戦いしたのに仲良くなんて」

「それじゃあ、もうそろそろ行くよ」

「嗚呼。またこいよ」

「合点だ」

僕は、再びヒノアラシをおぶって『迷宮の洞窟』を出た。

依頼6 VSガバイト ビビった時の戦い方（後書き）

終わった。

フォン「今回は長かったね。作者さんの実力では」

でも、あの目を瞑る戦法は、ある漫画からとったものなんだよ。

ヒノアラシ「いいの？ そんなことしても？」

さあ？

依頼7 不思議な力（前書き）

新年初の更新です。

フォン「てゆーか、更新遅っ！！」

気にすんな。

依頼 7 不思議な力

無事にコリンクの依頼を達成したその翌日。

「昨日はありがとうございましたっ！」

「ありがとうございましたっ」

コリンク兄妹がギルドにお礼をしにきた。

「別に気にしないでいいのに」

「いえ。妹を助けてもらったんですから」

「ですからっ」

兄の言葉を復唱する妹コリンク。

妹コリンクは、兄よりも少し体が小さく、頭に花をつけていた。

「あの、これはお礼の気持ちです。レントラーの牙と呼ばれるものです。受け取って下さい。」

兄コリンクが、レントラーの牙をとりだした。

「いいの？」

「はい」

「それじゃあ、遠慮なく」

僕は、レントラーの牙を取ろうとした瞬間、レントラーの牙が消えた。

「それでは、このレントラーの牙は私が預かる」

皆の視線が声の聞こえた方に集まる。
そこにいたのは、ペラップだった。

「お宝は親方様が預かるのが、ギルドのルールだ」

このくそ野郎があああああ！！

「あの、大丈夫ですか？」

「ですかっ？」

僕の異変に気づいたコリンク兄妹。ふ、流石だな。

「き、気にしなくていいよ。アハ、アハハハ！」

ヒノアラシが笑って誤魔化した。

それから少し後、コリンク兄妹は帰っていった。

「お前達、そんな所にいないで、今日はこっちだよ」

そういつてペラップは、二匹を掲示板に連れていった。だが、昨

日とは別の掲示板だった。

「この掲示板は？」

僕が、ムスツとした顔で言う。

僕は根に持つタイプなのだよ、ワトソンくん。

前の掲示板には、依頼人からの手紙だけだったが、この掲示板には、貼紙一枚一枚にポケモンの写真が載せてあった。僕たちは、このポケモン達が誰なのかわからなかった。

「これは全員お尋ね者なんだ。お前達にはこの中から誰かを懲らしめてもらう」

「む、無理無理（ぐノ・・、）」

顔文字を使って無理だと言い張るヒノアラシ。そこまで？

「ハハハ！ 大丈夫大丈夫♪ お尋ね者といっても世紀の大悪人から、こそ泥程度もいるから♪ この中から弱そうな奴を選んで懲らしめてくれればイイ。それじゃあ頼んだよ」

ペラップはそう言うのと下の階に行ってしまった。

僕は、掲示板にムスツとした顔でにらめっこしていた。

その時、ヒノアラシに嫌な予感がよぎる。

（こ、このままだと、フォンがヤヴァイ依頼を受けかねない！）

そう思ったヒノアラシは、フォンの気をそらせることにした。

「ね、ねえ、フォン」

「ん？」

「あ、あのさあ、依頼を決める前に、トレジャータウンで準備しない？」

「依頼決めた後で、作戦をねって準備した方がいいんじゃない？」

「うっ……！」

（くっ……ここまでか……！？）

「……まあ、いいけど」

僕の一言で、ヒノアラシは心の中でガッツポーズをした。

トレジャータウン。

「……とりあえず、カクレオン商店で結構買ったけど」

「じゃあ、戻ろうか」

「う、うん」

僕の表情が良くなっていたことが、ヒノアラシにとっては、幸いだった。

その時、二匹のポケモンがカクレオン商店に来た。みずねずみポケモンのマリルと、みずたまポケモンのルリリだ。どうやら兄妹のようだ。

「あ、マリルちゃん♪ ルリリちゃん♪ いらっしょい♪」

「あのカクレオンさん、林檎ください！」

「あいよ♪」

そう言つと、カクレオンは林檎をマリルに渡した。マリルは笑顔で林檎を受けとった。

「あれ？ これ一個多いですよ！」

「それはサービスだよ。二人で仲良くお食べ」

「あ、ありがとうございます！ カクレオンさん！ ルリリ、行くよ！」

「待つてよお兄ちゃん！」

二匹は自分達の家に帰ろうとすると、ルリリは急いで走ったためか、転んで林檎を落としてしまった。

僕は、そのコロコロ転がる林檎を拾って「はいよ」と渡した。

「ありがとう！ お兄ちゃん！」

林檎を渡した時、フォンは急な目眩に襲われた。

（こ、これは……なに？）

『た、助けて……！！』

誰かが、救助を求めている声が聞こえた。だが、それだけで他は別に何もなかった。

「おーい！ ルリリ！ 行くよ！」

「うん！ バイバイお兄ちゃん！」

というと、ルリリは、マリルと一緒に帰っていった。

「何だっただんだろ……」

（勘違い……かな？）

「さ、もうギルドに戻ろう」

「うん」

僕は、ギルドに戻ることにした。
のだが。

「あれ？ なにしてるの？」

戻る途中で、さっきのマリル達が、一匹のポケモンと話しをして
いた。

「あつ、先程はどうも。実は僕達、前に大切な物を落としてしまっ
たんですが…それをこのスリープさんが見たことがあるって言うん
で一緒に行くトコロなんです！」

少し興奮しながらマリルが説明する。その隣には、黄色いバクミ
たいな催眠ポケモンのスリープが立っていた。

「ああ。『トゲトゲ山』というところにね」

「そう。よかったね」

「はい！」

「では、行きましょうか」

スリープがそう言うと、三匹は、落とし物が落ちていた場所に向
かって行った。けれど、出発するときに、僕の肩にぶつかった。

「おっと。失礼」

三匹が行くのを見送っていると、フォンは先程の目眩に襲われた。

(くっ……またさっきの……)

一つの光景が浮かんできた。場所はどこかの山の頂上のような場所。そこに、二匹のポケモンがいた。

それは、スリープとルリリだった。だが、マリルの姿が見当たらない。

『言うことを聞かないと、痛い目に合わせるぞっ!!』

『た、助けて……!!』

その光景は、そこで途切れた。

「……………」

「? どうしたの? フォン」

「ん。いや。別に何でもないよ」

「そう。じゃあ帰ろう」

「……………」

あれは何だ? 夢? だけど、『何かある』、そんな気がする。

ギルドへと戻った二匹は、お尋ね者を選ぶこととなった。

「さて、誰から殺ろうか？」

「殺っちゃダメだよ!？」

「冗談じょうだ——」

僕の声は、そこで途切れた。

「? どうし——」

僕の見ているポスターを見た瞬間、ヒノアラシの声も途切れた。

「くそっ! やっぱりそうか!！」

「えっ…! やっぱりって?」

「実は……」

僕は、自分が聞いた声と、あの光景をヒノアラシに話した。

「そ…そんな…!？」

くそっ…！ さっきの皆に見せた笑みは、嘘だったのか！ なん
て野郎だ！

それにまだあの兄妹は幼い…簡単にあいつの罠に引っかかる。
だけど、何だ？ あいつは、何が目的なんだ？

「フォン！ 早く行かないとー！」

「うん。そうだね」

僕たちは、急いで『トゲトゲ山』に向かった。

僕たちが、『トゲトゲ山』に向かっていった少し後に、あるポケ
モンがギルドの玄関に来ていた。

「おお！ もうすぐ会えるぞ！ 愛しき妹よ！」

そう言いながら……。

依頼7 不思議な力（後書き）

フォン「ヒネリクロス！」

ヒノアラシ「ダメエー！」

さて、今回は、スリープと対決です。

ヒノアラシ「えっと、最後のは？」

フフフフ（黒）

依頼 8 変態（お尋ね者）と変態（兄）と（前書き）

今回、ヒノアラシがキャラブレイクします。

フォン「キャラ崩壊ね」

依頼 8 変態（お尋ね者）と変態（兄）と

僕たちが、『トゲトゲ山』に着いたとき、『トゲトゲ山』の入り口といえる場所でマリルがオロオロしていた。

どこことなく青いネコ型ロボットが肝心なときに役に立たない時に似てる。

「マリル！ 無事！？」

「あつ！ フォンさんたち」

マリルは、僕たちに気づいたようだ。

「あれ？ ルリリは？」

だが、そこにいるのは、マリルだけで、ルリリの姿はどこにもない。

「それが……」

「ま、まさか……！」

「ヒノアラシ、早くトゲトゲ山にいくよ」

「う、うん」

僕は、ヒノアラシを連れていこうとするが。

「待ってください」

「…？」

マリルが、それを止めた。

「ぼ、僕も…僕も、連れてって下さい！」

「えっ…でも、危険だよ？」

ヒノアラシが忠告する。

「で、でも、ルリリは、僕の大事な妹なんです！」

「マリル……」

「ヒノアラシ、マリルも連れていこう」

二匹の視線が同時に僕に向いた。

「だけど、一つ条件がある」

「えっ……」

「危険と思ったら、この“あなぬけの玉”で脱出すること」

フォンは、そう言うと、あなぬけの玉をバッグから取り出し、マリルに渡した。

「はい！」

「それじゃあ、いくよ!」

フォンの掛け声と共に、『トゲトゲ山』に入ってしまった。

「ロリコンは許さない!」

「えっ?」

ルリリとスリープは、『トゲトゲ山』の山頂にいた。

「あれ? 何もない……、スリープさん、落とし物は何処にあるの?」

ルリリはスリープの方を向いた。

スリープは微笑んでいたが、さっきのような優しい顔ではなく悪人みたいな恐ろしく微笑んでいた。

「すまないがここには落とし物は無いんだ。俺はお前を騙していたんだ」

「えっ……そんな……」

ルリリは、驚いた。信じなくなった。

「後ろを見てみる」

ルリリは、恐る恐る後ろを見た。

すると、そこには、ルリリぐらいの大きさでやつと入れそうなくらいの小さな穴があった。

「その小さな穴には、ある盗賊団が隠した財宝があるって噂があるんだ。だがな、俺は体がでかくて通ることができねえ。だから、小さいお前に、財宝を取ってきてもらいたいんだ。大丈夫だ。取ってきたら無事にお前のお兄ちゃんの所に帰してやるよ」

ルリリは、スリープの言っていることが理解不能だった。

「さあ…財宝を取ってくるんだ!!」

「い、いや…!!」

ルリリは、恐怖で身動きが取れずにいた。

「さあ! 早く!!」

「た、助けて……!!」

そのとき、

「ちよつとまったあ!!」

二人の視線が声の聞こえた方向に向いた。

「なんだお前らは！」

スリープたちの目の前にいたのは、僕たちだった。

「僕達は、チーム“ウイング”！ 探検隊だ！ 覚悟しろよ、この
ロリコン野郎！！」

「ろ、ロリコンだと！？」

「お兄ちゃん！！」

「る、ルリリ！」

感動の再会をやってる場合じゃないと思う。

「お、俺は、ロリコンじゃない！」

「お尋ね者スリープ……」

「「さあ、お前の罪を数えろ！」」

僕とヒノアラシは、声を揃えて叫んだ。

「……………」

「……………」

「……………」

一同沈黙。

「…………だから、こんな空気になるからやめようっていったのに！」

「うーん、じゃあ、これの抜きでやるか。というわけで、もう一度おねがいします」

「やり直さなくていいじゃん、もう」

「僕は、チーム“ウイング”！ 探検隊だ！ 覚悟しろよ、このロリコン野郎！！」

「そこから！？ そんなところからやるの！？」

「ろ、ロリコンだと！？」

「スリープもやらなくていいのよ！！」

「お兄ちゃん！！」

「る、ルリリ！」

「もうやめええええ！！」

ヒノアラシの叫びが『トゲトゲ山』に響き渡った。

「…と、冗談はここまでにしておいて」

「もう嫌…ツッコミ辞めたい」

「…だが断る」

「どうして、息ピッタリなのよ!？」

「さあ、さっさと捕まってもらうよ!..」

「そうはいかないな」

「無視ですか、そうですか…」

ヒノアラシは、頂垂れた。

「渦潮」

僕は、スリープに渦潮を放った。

「甘いぞ! “念力”!」

スリープは、念力で渦潮の動きを止め、僕にはね返した。

「おおっと」

僕は、渦潮をかわした。

「ならこれならどうだ! “渦潮” “渦潮” “渦潮” “渦s(ry」

「え、ちょ、やりsぎゃあああああ!」

僕の渦潮の連発にスリープは、防ぎきれず倒れた。

「あれ? もう終わったの? 私何もしてないけど?」

潮（ry
「

もはや、呪文のようになっているが……。

「もうやめてえ！」

「HANASE」

「もうとつくにスリープのHPは0よ！」

「……………」。

「……………ヒノアラシさんもノリノリですね」

そんな二匹を白目で見てるマリル兄妹。
すると、それに気づいたヒノアラシが頬を赤らめて、コホン、と
咳払いした。

「べ、別に、やりたくてやったわけじゃないんだからね」

「ヒノアラシにツンデレは似合わないよ」

「だから、違うんだってばあああー！」

僕は地面に突っ伏し酸欠状態になるほど大笑いした。

「ワタシハ“ジバコイル”トイマス。コノ地域ノ保安官デス。コノタビハオカゲサマデオ尋ネ者ヲ逮捕スルコトガ出来マシタ。感謝シマス。賞金ハギルドニ送ツテオキマス。アリガトウゴザイマシタ！」

そう言つて、ジバコイルは去つていった。

あれから、フォン達は、無事(?)ギルドに帰ることができた。

「これもチーム“ウイング”のおかげです。ありがとうございます
た」

マリルは僕たちにお礼を言った。

「良かったね♪」

さっきのことでフォンは、随分機嫌が良くなった。

「……………」

そのかわり、ヒノアラシの機嫌は随分悪くなった。
そんな時。

「ハルちゃん、そんな顔しちゃだめだよ〜ん♪」

後ろから誰かが、ヒノアラシをガバツ、と抱きついた。
勿論ヒノアラシは、

「……………ッ!!」

となる。

と思つたら、ヒノアラシが、自分に抱きついているその腕を、振り払いその後ろの誰かの顎に、見事な 竜拳を決めた。

ヒノアラシのご機嫌は、斜めじゃなくて90度だね、うん。

すると、そのヒノアラシの昇 拳によって、飛ばされたポケモンが起き上がった。

「まったく！ ハルちゃんが、このギルドで住み込みで働いているのに、どうして連絡してくれなかったんだい？ 僕は、妹のことを誰よりも愛しているのに」

首の周りから炎を吹き出し、燃え盛る体毛をこすり合わせて爆風を発生させたりすることができる。怒りが頂点に達すると、近寄れないほど熱く、その熱によって屋気楼を発生させ、自分の姿を隠すこともできる。

という、かざんポケモンの、バクフーンだ。

「何でココに来たのよ！！？ お兄ちゃん！！」

ヒノアラシがそう叫んだ。

「えっ！？ お兄ちゃん！！？」

ギルドの一同が驚きの声をあげる。

「えーっと、お兄ちゃんってどゆこと？」

「そのまま意味！」

「ご立腹のようだ。

「どうして、お兄ちゃんがココにいるのよー!」

「フツ、愚問だね。妹のハルちゃんがいるところに、兄であるこの僕、ガルドがいるのはあたり前のことだよ」

バクフーン改め、ガルドがそう言う。が…。

「帰れえ! 家じゃなくて、土に帰れえ!」

ヒノアラシは、怒りのオーラの他にドス黒いオーラを纏っていた。ああ、どうすることもできないね、これ。

「そんなよそよそしいこと言っちゃあ、お兄ちゃん悲しくて死んじや「死んじやってください」」

これ本当にヤバイんじゃないの? そう思った僕は、急いである人物の所へむかった。

「あれ? どうしたんですか?」

ある人物とは、ふうりんポケモンの、チリーンだ。

「チリーン、ヒノアラシに“催眠術”を!」

「あ、はい!」

チリーンは、僕の言いたいことがわかり、言うとおりにした。

催眠術をかけられたヒノアラシは、パタンツと倒れ眠ってしまった。

僕は、眠ったヒノアラシを背負い自分たちの部屋に運んだ。

「……じゃあ、ガルドさんは、ヒノアラシの兄なんですよ？」

「うん。そうだよ」

僕は、ヒノアラシを自分たちの部屋に運んだ後、ヒノアラシの兄のガルドに色々聞くことにした。

「じゃあ、さっきからヒノアラシのことを“ハルちゃん”って言うてたのは？」

「ああ、実は、ハルちゃんには、ハルネという名前があるんだ」

「ええっ！？ ヒノアラシに名前なんてあったの！？」

「まあね。でも、何で自分の名前を伏せてたんだろうね？」

それは、貴方の妹ということを世間に隠しておきたかったんじゃないですか？

「じゃあ、何でギルドに来たんですか？」

「いや、可愛い妹をみるのが半分で、もう一半分は、此処らの“調査”かな」

「「調査？」」

皆が、オウムのように復唱する。

「うん。まあ、その辺は、おいおい話すとするよ。そんなことより、君がフォン君かい？」

ガルドが、僕のことを指さしながら言う。

「え、あ、はい。そうですけど」

「実は、君とハルちゃんの手部屋に今日泊めてもらうことになったんだ」

「ええっ!？」

そんないきなり！

「まあまあ、ハルちゃんのこと色々教えてあげるから」

「あ、はい」

フォンは、徹夜を覚悟した。

依頼8 変態（お尋ね者）と変態（兄）と（後書き）

ハルネ↑「死んじゃえ！」

いきなり何言ってるんだい？ 君は。

ハルネ「もういやだあ！」

ガルド「ダークになったハルちゃんも萌えだね」

フォン「……………（汗）」

依頼9 見張り番& a m p・謎の人物（前書き）

今回ちょっと手抜きです。

更新遅れたくせに申し訳ありません。

依頼9 見張り番 & a m p : 謎の人物

翌日の朝早く、一匹のポケモンがギルドの一室から出ようとしていた。

「何処に行くんですか？ ガルドさん」

部屋から出ていこうとしたガルドさんは、反射的にその声の方へ向いた。

「おや、フォンくん、起きたのかい？」

「えー、あー、はい。眠いですけど」

いや、まあ、昨日の晩は、ハルネ（ヒノアラシ）の話ばかりだったから全然眠い。

「で、どこ行くんですか？」

「いやー、昨日言ったよね。“調査”だって」

「あー、そんなこと言ってたよな」

何の調査なのだろう？

「別にココに長居することもないしね」

うん、確かに。

「僕は、妹を見ただけで幸せなんだ」

うん、シスコンだな。

「それより、フォンくん」

「はい？」

「よくぞ妹のわがままに付き合ってくれた。君ならハルちゃんを任せられる」

うん？ どういう意味だろうか？

「実はさ、大分前からハルちゃんが探検隊になったことは気づいてたんだ」

マジですか！？ ってか、やっぱりシスコン過ぎるぞ！

「そこで、どんな相棒パートナーと共に探検隊をしているのか気になってたんだ」

妹が探検隊になったことは知ってるのに、相棒パートナーのことは知らないんだ。

「僕は、妹限定なんだよ」

なるほど、よく分かった。と僕は頷く。

「ハルちゃんの相棒パートナーが君でよかったよ。探検を続けて、これから僕大切な妹を守ってやっておくれよ」

「え、と、あ、はい。わかりました」

ぎこちない口調で返事をする。

ガルドさんは、じゃあね、というと出ていってしまった。

「はっ！」

その後、魔されてたっばい汗だくのハルネが、ガバツと起き上がった。

「どーした？」

少し息が荒かった。

「悪夢をみた。……お兄ちゃんがギルドに来た夢」

夢じゃありません。

と、言えるわけがなく、『来てなかった』という設定にしようと決めた。

「そ、そーなんだ」

てか、悪夢なんだ。

「ま、夢なら良かったじゃん。ハミネ」

「うん。夢で良かった……ん?!」

ハルネが驚きの表情で見てくる。
ん? 何か変なこと言った?

「なんで私の名前知ってるの??」

「へ? あ、あー! しまった!」

「どーゆーことが教えてくれる?」

目が笑ってない。怖いよーママン。

「はい」

頷くことしか出来なかった。

「やっぱりあれは夢じゃなかったんだ……」

僕は、全てのことを話した。そうするしか生き残る事が出来なかったんだ!

「つてゆーか、なんでそこまでガルドさんが嫌いなのか？」

「いや、嫌いだけど、好きなんだよ」

意味不明ですよ、ハルネさん。

「お兄ちゃんつてさ、凄くシスコンじゃん。でもさ、もしかしたらそれ……私の所為かもしれないんだ」

僕は、それを聞いた瞬間、ホントに意味がわからなかった。

「私つて、臆病で泣き虫じゃん」

「うん、そうだね！」

「そこは嘘でも『ハルネは臆病じゃないよ！』とか言ってくれないの！？」

「ハルネは臆病じゃないよー（棒読み）」

「いい感じが台無しじゃん」

「続きは？」

無理やり先に進ませる。

「……それが関係あるんじゃないかなって……」

「ぶっ~~~~~~~~ん」

「何そのどーでもいい感が滅茶苦茶出てる返事!？」

まーねー。

「ハミネは、考えすぎなだけでしょ」

「っ」

おーおー、驚きの表情だね。

「あのポケモン^{ひと}は、ハルネが臆病じゃなくてもあんな風になってたと思うよ」

「……………」

「もーちよっと、気楽になってたほうがいいでしょ？」

「……………うん、そうだね」

ハルネは、コクリと頷いた。

「…でも、あのポケモン^{ひと}、シスコン過ぎる」

「うん、言えてる」

「「はあ〜」……………」

僕たちは、同時にため息が出た。

「来るなら、もっと立派になってから来て欲しかった……………」

ハルネの呟きは、誰にも聞こえなかった。

「見張り番？」

ハルネは、首を傾げる。

「オマエ達もギルドに初めて来た時、足形判定されただろう」

ドゴームは、そういった。

「あゝそんなこともあったあった」

「それってディグダの仕事でしょ？」

僕は、ハルネの言葉にうんうん、と頷く。

「すみません。フォンさん、ハルネさん」

突然地中から声が聞こえ、ポコツ、と地面から、ディグダが現れた。

「つてゆーか、ディグダまでハルネって……」。

「僕のお父さん、また仕事サボったみたいなんです……。ボクが掲示板の更新をしなきゃならないんです」

なるほど。後でしめよう。

「それじゃあ、任せた」

ドゴームが無責任に言った。まあ、いいけど。

見張り番をするために、見張り番をするための穴に入ってしまったわけだが……。

「暗っ！！」

あの見張り穴から漏れる光しか無いため予想以上に暗い。

「見張り穴の下までついたか？」

「うん。ついたよ」

「よし。見張り穴の上にポケモンが乗ったらそのポケモンの足型を教えてくれ。間違えるなよ！」

「イエッサー！」

その後ずっと見張り番の仕事を続け、ペラップが「来客終了」

と言った頃にはもう陽が沈む頃だった。

「首が……痛い……」

僕は、横でこくんこくん、と頷く。

「見張り番の仕事だが、中々良い出来だったぞ♪ご褒美だ♪」

そう言つて、ペラップから渡されたのは、200ポケ、キトサン、
そしておいしいミツだった。

「よ、良かったね。フォン」

「……（こくんこくん）」

「ん？ どうしてフォンは喋らない？」

ペラップは、首を傾げた。

「あー、私の代わりにずっと叫んでくれたから、声が出なくなっちゃったんだって。明日には戻れると思うよ」

ハルネの言う事にまたこくんこくん、と頷く。

「なんだかびみょーな一日だなー」と思った。

『キザキの森』といわれる深い森の一番奥。

そこには、エメラルド色の魔方陣のようなものに小さな歯車が埋め込まれていた。

その前にいるのは、一匹のポケモン。

ドラゴンのような姿で、目は複眼を思わせる赤いカバーのようなものに覆われており、大きな翼と尻尾がある一匹のポケモン。

「ふうん、これが『時の歯車』……」

そのポケモンは、つぶやくようにそう言うと『時の歯車』を掴んだ。

「へえ、なかなか綺麗だ。流石、未来を変えることができるお宝だ」

そう言つと、そのポケモンは翼を羽ばたかせ、何処かに飛んでいった。

依頼9 見張り番& a m p・謎の人物（後書き）

フォン「最後のは一体？」

あれ？ 喋れるんだ。

フォン「ま、何でもありの後書きですから」

まあ、最後のは、オリジナルのキャラです。勿論、あの方も出ますよ。

ハルネ「誰？」

依頼10 滝壺の洞窟

翌日。

喉の痛みが完全になくなった。ある意味凄いな。

僕たちは朝の朝礼が終わった後、ペラップに呼ばれてた。

「今日はお前達に探検隊らしいことをしてもらうぞ」

マジすか！？

「本当！？ やったあー！！」

ハルネは、大喜びしている。どんだけ嬉しいんだよ。

「あんまりはしゃぐな。とりあえず不思議な地図を出してくれ」

ペラップに促され、ユウキは不思議な地図を広げた。ペラップは地図で目的の場所の説明を始めた。

「ここが我々のギルド、そしてここが目的地の滝だ。この滝には何か秘密があるんじゃないかと聞いてな。お前達に調べて貰いたいんだ」

「わかった」

「頼んだぞ」

僕はハルネの方に目を向ける。

そこにいたハルネは、見るからにウズウズしていた。

うゝむ、大丈夫だろうか？ 少し心配だ。

「凄いワクワクしてきちゃった！ 早くいこうー！」

「あー、はいはい」

こうして二匹は、その滝に向かった。

「で、ここだよね」

二匹は目的地の滝にたどり着いた。

「凄い勢いだよね……、キャア！」

「久々にハルネが女の子らしく見えた」

「なんですって（怒）」

ハルネは少し滝に近づいただけで吹き飛ばされてしまった。

「フォンも触ってみたら」

「僕に同じ目にあえと？」

ハルネは、力強く頷いた。くそう。

「……分かったよ。……キャア!」

「……フォン、私を馬鹿にしてるの?」

「イエイエ、ソナコトハゴザイマセン。ハイ」

その時、急にフォンに目眩が襲ってきた。
今ですか……?

ある一つの光景が見えた。

一匹のポケモンが滝に突っ込んでいった。
すると、その奥は洞窟になっていて、そのポケモンは洞窟に入っ
ていった。

……。

「…マジすか!?!」

「えっ? なに、なに?!」

とりあえず、今のことをハルネに話した。

「突っ込む気?」

「もち」

ハルネは絶句した。

「大丈夫だつて、一気に行けば」

「その自信はどこから？」

「頭蓋骨？」

「少し期待した私が馬鹿だった」

で、結局、行くことになった。

「よし、行くよ。……………1、2、3……！」

ハルネは、走り始めた。

「……………で行くんだよ？」

ズシャアアアアアアア

そして、盛大にズッコケた。

「今度こそ行くよ」

頭にタンコブが出来ていた。正直、めちゃくちゃ痛い。
自業自得だけどさ。

「1、2、3！」

僕たちは、滝に突っ込んだ。

「ぎゃあああ！ 顔が摩擦で痛い！！！」

「でしょうね」

僕は顔から突っ込んで地面に擦れてしまった。滅茶苦茶痛かった、
まる。

「それにしても本当に洞窟だったんだ」

「これが僕の能力さ！」

「……早く行こう」

最近、ハルネが僕に冷たい……。

最深部にたどり着いた。そこには、虹のような色とりどりの宝石があつた。『迷宮の洞窟』に似てる。

え？ それまでの道のりはって？ 面倒だから割愛。

「凄いね」

僕たちは、宝石の中で一番大きいのを見つけた。

「これ凄い大きいよ！ これをもって帰れば皆驚くね！！」

「『欲』に負けたwww」

「それじゃあ、引っ張ってみよう」

ハルネが、引っ張るが全然動く気配がない。

「交代……」

「合点だ」

僕も、引っ張ってみるもののまったく動かない。

「引いてダメなら、押してみな」

僕はそう言いながら、押してみた。カチツという機械みたいな音が聞こえた。

そして、ゴゴゴゴゴゴという音とともに津波が何処からか迫って来ていた。

「え？ え？ えええええっ？！」

「僕、オワタ」

そして、見事流されましたさ。

おしまい。

「終わらせないよおお！」

二匹が目を覚ますと、先程いた場所とは違かった。それは洞窟ではなく、温泉だった。

「あなた達、大丈夫？」

「ここって死後の世界？」

「温泉よ」

僕の質問に一匹のポケモンが答えた。熊みtain姿に、額に三日月みtain模様があるヒメグマだ。

「死後の世界って、温泉？」

「いや、それ違う」

「ここはただの温泉じゃ」

一匹のポケモンが声をかけてきた。亀みtainなポケモン、コータスだ。

「オヌシ達は何処からきたんじゃ？」

「僕達は滝壺の洞窟から流されてきたんだ」

「なんと！……それは大変じゃったのう。温泉で疲れを癒すといぞ」

「お言葉に甘える」

僕たちはしばらく温泉でゆっくりした後、ギルドに帰った。

「なるほど……あの滝の奥は洞窟になっていて、最深部には宝石があったと。いやいや、これは凄い発見だよ！」

僕は、目眩の時に見た光景が気になっていたが、とりあえずスルーした。

「やっ
たね」

ハルネは、上機嫌だ
った。

依頼10 滝壺の洞窟（後書き）

疲れた。

俺に時間をわけてくれー！

依頼11 いらない再会（前書き）

フォン「長かったね。せつかくの夏休みなのに」

いや、色々あったんだよ。

フォン「今なら、作者を殺しても無罪になるような気がする」

ええっ！？

依頼11 いらない再会

「実は、キザキの森にある『時の歯車』が盗まれたらしい」

ペラップは、朝礼の後、そう言ったのだ。
一同、愕然となった。

「な、なんだって！！……って、『時の歯車』って何？」

僕の言葉で、一同ずっこけた。なんで？

「『時の歯車』って言うのはね」

唯一ずっこけなかった親方様が口を開いた。

「周辺の時間を制御する秘宝でね、全部で5つあって、そのうち4つは守護者となるポケモンが存在を隠しているため、設置場所を知る者はほとんどいないんだよ。これを所定の位置から取るとね、その地域の時間が止まっちゃって、だから、悪党であつてもこれを盗ろうとする者はいなくて、もし盗っちゃうなら、それは相当な悪党だね」

なるほど、なるほど。よくわかりましたぜ、親分。

「つまり、今、キザキの森の時は止まってるってことだよね」

「そーゆーこと」

それ色々やばくね？

「だけど、まさか『時の歯車』を盗む奴なんて……信じられない」

「とりあえず、今ジバコイル保安官が調査している。時の歯車が盗まれたということは、他の『時の歯車』も盗まれる可能性があるということだ。何か不審なことがあったら直ぐに知らせるんだよ。以上だ。さあ、仕事にかかるよ！」

『お前達は今日は掲示板の仕事をしてくれ。頼んだぞ』

ペラップにそう言われて、掲示板の前で悩んでいた。

勿論そのことは、依頼の事ではなく、時の歯車のことである。

「うー……ん」

「ねえ、フォン。そんなに悩まなくても……」

「いや、何か引つかかるんだよね。魚の骨が喉に引つかかるように」

「なんで、それで例えたの？」

そんな刹那、

「げっ！ お、お前達は！？」

と、何処かで聞いたことのあるような声が聞こえ、振り返ると、奴らがいた。

「お、お前たちは！ ジャインとス夫！！」

「何故、そうなる！？」

ジャイア……ゲフンゲフン、ドガースとス……ゴホンゴホン、ズバツトの二体がいた。

「お前たちは、僕たちの戦いで死んだはず！？」

「死んでねえよ（怒）」

「でも、何でアンタたちが？」

「ハッ！ オレ達は探検隊なんだぜ？ ヘヘッ」

「驚愕の真実！？」

「探検隊が掲示板の前に来て何が悪いんだよ？ ああ？」

「……！」

ハルネは、少し後ずさり、僕は眉をひそめた。

「それにしても、ここは弱虫ちゃんが来るような場所じゃねえぜ？」

「うう……」

ハルネは、また後ずさった。さりげなく、僕の後ろに隠れるように。

「いや、でもさ、その弱虫ちゃんに負けた君たちが、あまり偉そうに言える立場じゃないだろう?」

「う、うるせえ! あの場合は、アニキがいなかったからだ」

「アニキ?」

アニキいたの? じゃあ、次は神成さんかな?
話をするとなんとやら、という言葉通りに奴がきた。

「おお! この二オイは!!」

「二オイ?」

「へへっ! アニキのおでした!!」

その刹那、ギルド全体が異様な臭いに包まれた。

「……この二オイは……!」

「逆にすい……!」

「お前たち、何時まで待たせる気だ」

「……………!」

その声から感じられる威圧感は、ドガースたちよりも重く思えた。

「オマエ達、金になりそうな仕事はあったのか？」

アニキ——と呼ばれたこのポケモンは、尻尾の先端がちょうど前髪のようになっているポケモン——スカタンクだ。

「掲示板には、あんまり金になりそうなヤツはありませんでした」

いや、お前らまだ見てないじゃん。

「ならこんな所に用はねえな。とつとと行くぞ！」

「「ヘイっ!!」「」

スカタンクは、そう言うと、ドガースたちとギルドを去っていった。

「……何だっただんだろうね？」

「おそらく、ロット団みたいのやつじゃない？」

もう、どうでもいいや。

こうして、僕たちは、いつも通り依頼をこなしていった。

翌日。

僕は、この時まで、昨日会ったアイツラのことをもう忘れていた。そう、この時まででは。

「えー、今日はみんなに伝えたい事がある。近日に我々ギルドは、遠征を行うことになった」

「遠征でゲスか？」

「きゃー！　楽しみですわー！」

遠征……ふむ。遠足みたいなものか。

「そこでだ」

再びペラップに視線が集まる。

「今回の遠征に一時的に参加してもらった者たちがいる。いきなり一緒に行動しても連携が取れないと思うからな。二、三日一緒に生活することになった」

その言葉で、再びざわつき始めた。その時だ。ペラップとブクリン以外の全員がいやなにおいが漂ってる事に気付いた。

「こ、このニオイは……！」

「ま、まさか！」

他の弟子達が悪臭で渋い顔をしてる中、ペラップはいつもと変わらぬ様子で平然としていた。ちょっとイラッとくる。

そして、平然とアイツラが登場してきた。

「ケツ、ドガースだ」

「ズバットだ。よろしくな」

ああ、ジャインとス 夫の登場だ。チラッとハルネに視線を向ける。

うわ、露骨に嫌な顔してる。

「そして俺様が、このチーム『ドクローズ』のリーダー、スカタンクだ。覚えておけ」

昨日初登場のアニキ——スカタンクが、こちらに視線をむける。

「よろしくな」

その言葉は、完全に僕たちを見下している。チラッとハルネに視線を向ける。

うわ、見てらんない。

てか、僕、昨日あったばかりなのに、もう忘れてたんだけど。

依頼11 いらない再会（後書き）

ついに、新章『遠征編』です。

この章も、オリジナルの設定を混ぜようと思います。

では
ミ

依頼12 林檎の森で出会ったもの（前書き）

今回、あのキャラが……！

フォン「誰だよ……？」

今回qqqqっばいよっ..

依頼 12 林檎の森で出会ったもの

「今日はお前達に食料の調達を頼みたい」

朝礼後、ペラップにそう言われた。

「食料？ いっぱいあるんじゃないの？」

「いや、あるのはある」

「じゃあ……」

「セカイイチに至っては全て底をついたのだ……」

「セカイイチって、毎度毎度親方様が食べてるあれ？」

「とても大きく、とても美味しい林檎だ。そして親方の好物でもある。セカイイチが無いと親方様は……」

ペラップは急に黙りこんでしまった。

「大体わかった。行くぞ、ワトソンくん」

「唐突だね、ホームズ」

林檎の森。

ペラップがこの森の奥にセカイイチがあると言っていた。

「すごいね、此处」

「おそらく林檎の木しか、ないんじゃないかな？」

あたり一面に真つ赤な林檎が実った木だ。
周囲に甘いいい香りを漂っていた。

「これじゃあ、どれがセカイイチかわからないかも……」

「でも、ペラップはとても大きい林檎って言ってたし、すぐわかるんじゃないかな？」

「…なるほど」

「行くぞ、ワトソンくん」

「それ、まだ続けるの？ ホームズ」

「こうして僕たちは、襲いかかってくる者たちをちぎっては投げ、

のは、僕だけだろうか？

「あ、もしかしてあれじゃない？」

「ほら、スルーした」

僕たちの目の前には、周りの木とは、比べ物にならないくらいの大樹に普通の林檎よりも、大きくて真っ赤な林檎が実っていた。

「ってことは、ここが奥地かな」

「そうっばいね。それじゃあ採ろうか」

僕の言葉にハルネは、頷いた。

セカイイチの大樹（命名フォン）に近づこうとした時、3つの何かが降ってきた。

「クククククッ」

「その如何にも三流の悪者の笑い声は！」

「うるせえ！」

「ドクローズ！！」

「そうそれ！」

「「「いやいやいや！ 忘れんじゃねエぞ！！」」」

「で、何かよう？」

「へへッ、そんなお前たちの任務を邪魔しにきた、なんて口が裂けても言えねえよ」

「ギルドの食料倉庫からセカイイチや食料を盗ったのも俺たち、何て言えねエな」

「「そうだよな、アニキッ!?!」」

……こいつら、馬鹿だ、人間国宝つて程の馬鹿だ。

あ、人間じゃねえや、こいつら。

何だかスカタンクに同情しちゃう。

「ああ、そうだな」

「あんたも馬鹿か!?!」

ハルネがスカタンクに突っ込んだ。

いや、まあ、スカタンクも馬鹿だということにも気づいた。
この三馬鹿が!!--

「おっと、おしゃべりがすぎたようだ」

「お前たちがな」

「いくぜ、お前ら!!--」

「「おお!!--」」

僕たちは、何かくると思い、構える。

「くられ！ 毒ガススペシャルコンボ！！」

「たとば！！」

僕たちに奴らは、強力な毒ガスを放ち、僕は悲鳴とは思えない悲鳴をあげた。

あまりの異臭に僕たちは、意識を失った。

「鼻が……」

「まがる……」

意識を失い続け、ようやく起き上がった。辺りを見回すと、ドローズがいなくなっていた。それどころか、セカイイチまでもなかった。

「そ、そんな……」

「なるほど、邪魔するってこついうことか」

「なに感心してるの！？」

「……さて、どうしようか」

「やっぱり、ペラップに報告しないと……」

「『失敗した』という報告はしなくていいですよ」

「……え？」

僕でもなければ、ハルネでもない第三者の声が、この森に響いた。僕達が辺りを見渡すと、セカイイチの大樹にもたれ掛かる影を見つけた。

小さくピンク色の体、それに長い尻尾ポケモン、ミュウだ。

「こんな時に新キャラ登場ですか？」

「心配は無用です。わたくしの登場でこの物語のアクセス数は、うなぎのぼりです」

「あ、うん。ガタ落ちじゃない？」

「それに、メタ発言やめて？」

「考慮します」

「てゆうか、誰？」

「あら、これは失礼。謎の美少女、と名乗っておきましょう」

「オーケー。痛い人ね」

「正確には、“人”ではなく、“ポケモン”ですが」

「ああ、そつか。じゃあ、痛いポケム」

「どうでもいいよ!!」

むう、せつかくの僕と、謎の美少女（笑）との言葉のキャッチボールを。

「もういいから、名前教えてよ、名前。私は、ハルネ。で、こつちがフォン」

「……ええ、知っていますわ」

謎の美少女（笑）は、僕たちに聞こえないくらいの音量で呟いた。

「え？」

「いえ、なんでもございませんですよ。わたくしの名前は、ラルクです」

「……で、ラルクは、何で出てきたの？」

「お二人をおちよくりに……、あ、ちよ、その林檎を投げるすぶりは何ですか?! 林檎はボールじゃなゲフツ!? ちよ、らめえええええ!!」

しばらくお待ち下さい。（・・ω・・）

「あれ、何このデジャヴ」

「実は、セカイイチを盗られた憐れなお二人さんに……あ、やめっ、林檎を投げないで」

「林檎はボールじゃないので、良い子は真似しないでね フォ
ンお兄さんとの約束だぞ」

「……………」

「あ、やめっ、そんな目で見ないで」

「……要件は？」

ハルネが、ずいっとラルクに詰め寄る。
ラルクは、少し後ずさる。

「よ・う・け・ん・は？」

おおっ、ラルクの目尻に雫が……。

「じ、実は、お二人にこれを……」

そう言つて、ラルクはハルネに、バスケットを渡した。
その中には、数個のセカイイチが。

「こ、これつて……！」

「あの、実は、セカイイチの実る木は、ほかにもあるんです」

「マジで！？」

「それでは、わたくしは帰らせていただきますー……」

ラルクは、逃げるように帰っていった。

いや、全速力だろう。

「なんだつたんだろう？」

「そんなん知らんがな。」

「おお、お前たちに頼んでおいて正解だったな♪ うんうん♪」

驚くドクローズを尻目に、セカイイチをペラップに渡した。

「……まあ、なにはともあれ」

「依頼達成だね」

ラルクって、本当に何者なのだろうか……。

「せっかく手助けしたのに……」

林檎の森に、しくしく泣くラルクの姿があったとか、なかったとか。

依頼 12 林檎の森で出会ったもの（後書き）

一番憐れなのラルクじゃね？

フォン「終われよければ、なんとやら」

依頼13 遠征開始！そして、出会ったもの（前書き）

『赤・青』を執筆してたら、いつの間にかこっちが書き終わってた
W W W

フォン「笑い事じゃない」

ですよー。

フォン「そして、グダグダ」

ですよー。

依頼13 遠征開始！そして、出会ったもの

「お、親方様！？こ、これは……！？」

ある日の晩、ペラップはある紙を持ちながら、プクリンに詰め寄った。

「うん、そうだよ、その紙に書いてある通り」

「で、ですが！これでは……」

「……………」

「…………親方様？」

「…………ZZZ」

「…………やっぱり寝てますよねー」

ペラップは、がっくりと頂垂れた。

『林檎の森』の出来事から一週間が過ぎた。

「ついにきたね……」

そう、この日は遠征のメンバーが発表される日。

「えー……、それでは、遠征に行くメンバーを発表する」

朝礼後にそういうペラップだが……。

「あれ？」

みなさんなら、ちょっと変だと思いませんか？

遠征のメンバーの発表するのに、何も持っていないなんてね。普通だったら、何か紙の一つや二つ持ってるだろう。

いや、すでに暗記している！ とかだったら少し納得できるだろう。

でも。

「メンバーは、だな……その…あれだ」

あれって、何だ？

ペラップの様子がおかしい。みんなだって、じれったいような目でペラップを見る。

「ええい！ どうにでもなれ！」

ペラップ、お前なんか変だ。

皆の衆、お知らせしよう。

待ちに待った遠征のメンバーが、今！ここに発表された！

「遠征に行くメンバーは………ぜ、全員だ！！」

その時、世界が静止したような気がした！

というのは、思わぬ発言に愕然として固まってしまったただけなんだ、皆の衆は。

そして世界が動き始めたような気がした！

「『ぜ、全員ッ！！？』『』」

おお、息ぴったりだ。

親方様によると、『戸締りしとくから大丈夫だよ？ トモダチトモダチ』だ、そうだ。

それでいいのか、親方様。

その後、遠征の準備が終了した僕たちは、再び集合していた。

「では、これから、遠征についての説明を始める」

全員揃ったのを確認すると、早速ペラップは説明会を開始した。

「まず、今回の遠征の目的。それは、ここより遙か東にある湖を調査する事だ。その湖の名前は『霧の湖』と呼ばれていて、その名の通り常に霧がかかっている。その為、はっきりと確認された事のない、幻の場所なのだ。そこには、とても美しいお宝があると言われている」

長々と説明し終えた、ペラップは、次の指示を出した。

「地図を出してくれ」

僕は言われた通り、地図を出す。

「『霧の湖』があるとされているのは、ここだ。未開の地なので、雲に覆われてはつきりと記されていないが、ここから、かなり距離があるだろう」

ずっと東の方だった。トレジャータウンは大陸の西の海岸沿いにあるから、ペラップの言った通り、かなり距離がある。

「だから、『高原の麓』という場所で、ベースキャンプを張ることにする」

なるほどね。遠征は思ったよりも難しいそうだ。

「このベースキャンプまでは、いくつかのグループに分かれていく作戦で、行動することになった。まず、最初のグループ。キマワリ、ドゴーム、デイグダ、グレッグル」

「お前ら！ 足を引っ張るんじゃないぞ！」

「アナタに言われたくありませんわ!」

キマワリとドゴームが言い争ってるけど、スルーしよう。

「次のグループは、ダグトリオ、チリーン、ヘイガニ、ビツパ」

「いいメンバーだ」

「よろしくおねがいしますね」

あれ？ 残りメンバーって……。

「親方様は、私と、ということ……よろしいですね?」

「ええーっ! ペラップといっしょ!? つまんない!」

「わがまま言わないでください。作戦ですので」

んん？ あれ？

「ドクローズの方々は、単独でおねがいしますね」

「承知しました。ククククッ」

あれ〜？

「そして、最後のチームは、フォンとハルネだ」

やっぱりそうなりますよね〜。残りものってことで。

まあ、いつも通りってことで……。

「みんなっ ♪ がんばって、行く——っ ♪」

「「「おお——っ！」「」」

「で、私たちは、海沿いの道から行くことになったんだね」

「まあ、ぼちぼち行きましようか」

「でも、あんまりのんびりできないよ？」

そんな他愛もない会話をしながら進んでいく僕たち。
…のだが。

瞬間、ドラゴンのような姿で、目は複眼を思わせる赤いカバーの
ようなものに覆われており、大きな翼と尻尾がある一匹のポケモン
が、空から僕たちの前に降りてきた。

「な、何奴！？」

「いや、あやしい者じゃないから」

そう言う奴が怪しいんだぞ！

「いや、ただ道を教えてもらおうと……」

外れました。仕方ないね。

「僕は、フライゴンのイツキ。宜しく」

「五ツ木？」

「模試じゃないよ？」

ですよねー。言ってみたかっただけ。

そして、僕たちも自己紹介したら、イツキは少し俯き、何か考え始めた。

「おーい？ 生きてるかー？」

「おかしくない？ 考えてるだけで、その質問は」

「じゃあ、何考えてたの？」

「……いや、何でもない」

何でもないわけないでしょ。

「……ところで、イツキは、何処に行きたいの？」

そういえば、道を訊きたいとか、なんとか……。

「ああ、実は、『霧の湖』へ……」

「えっ？」

ハルネが、少し驚いたような顔をした。

そりゃあそうだ。今から行く遠征の目的地と同じ場所に行きたいという奴が、目の前に現れたのだ。

「……それじゃあ、一緒に行かない？」

ハルネの発言に今度は僕たちが驚いた。
なんでそうなった。

「実は、私たち、遠征で『霧の湖』へ行くことになってるの。フオンも別にいいでしょ？」

「…別に構わないけどさ」

「じゃあ、決まりね」

おいおいハルネさん、イツキの意見はまるっきり無視なの？

「それじゃあ、お言葉に甘えようかな」

甘えちゃうんですか。

「ここは？」

イツキと同行することになって、再び進み始めた僕たちの目の前にあるのは、洞窟。

「『沿岸の岩場』だつて。ここを通らないといけないみたい」

「……でも、もうそろそろ日が暮れてきたし、今日はここで休んだほうがいい」

イツキの意見に反対する者はおらず、結局休むことになった。

「もう少し、かな」

フォンとハルネが、とつくに寝静まっている時。

イツキは、何かを片手に月を眺めていた。

「『霧の湖』に二つ目が……」

イツキは、月から手に持っているものに視線を向ける。
月に照らされたそれは、『時の歯車』だった――。

依頼13 遠征開始！そして、出会ったもの（後書き）

フォン「謎だよねえ、イツキって」

物語が進むにつれてわかるよ。

人気投票も実施中です！

詳しくは、『ポケモン 不思議のダンジョン ギルドの掲示板』を
！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4118m/>

ポケモン 不思議のダンジョン —時・闇・空の絆—

2011年10月7日00時36分発行